画廊

能村　研三

夏惜しむ暮色違へる遠景色

ジェンダーのすすむ人の世日雷

夕凪や船を焚きたる火の勢ひ

庭茗荷かつては父が摘みくれし

表紙絵

「能村登四郎年譜」によれば、「馬酔木」に入会したのは、「昭和十四年で、ある時書店で表紙絵の美しい『馬酔木』を発見。今までの自分のもっていた俳句のイメージと全く異なっている新鮮さに心を動かされて投句してみる気になった」とある。「馬酔木」の表紙絵は水原秋櫻子先生が自ら選んだもので、号が変わるごとに先生がお持ちの絵を表紙絵とされていたそうだ。その「馬酔木」の表紙絵となった一枚の絵を、秋櫻子から登四郎に何かのご褒美でいただいた。今も我が家の宝物として大事に保管している。

先日現「馬酔木」主宰の德田千鶴子さんにお会いした時、その絵に鹿児島の桜島が描かれていることをお話したところ、おそらくその絵は曾宮一念という洋画家が書かれた絵だと教えて下さった。早速曾宮一念という方を調べてみると「洋画家、随筆家、歌人」で黒田清輝の指導を受けた画家、一八九三年に東京で生まれ東京で生まれ百一歳まで生きられ

今朝秋のダム湖に生えし死木かな

未見なる幼兄の忌や益母草

豊の秋まだ一鎌も入れざりし

朴一葉落つそれからの月日かな

画廊よりついて来たりし秋思かな

括りゐて弾力のある矢切葱

た方で、桜島には「桜島渡航百回」を自称するほどたびたび訪れて桜島を描いたと言われている。

俳句結社誌の表紙絵というものが、いかに大事かということがわかる。

五十年の誌齢を積んだ「沖」も表紙絵については、登四郎はかなりこだわりを持っていた。創刊号の表紙絵は加藤利以地という方の絵で、浜辺に流れついた流木をペン画で描いたもので、創刊から三号まで、その絵が飾った。加藤利以地さんは確か、沖の創刊にアドバイスを頂いた村井和一さんのご紹介であったと思う。お茶の水の喫茶店の外観を描いた表紙絵などもあった。その後、版画絵の秋山巖さんの絵が表紙を飾ったこともあった。秋山巖さんは棟方志功に師事した人で種田山頭火の俳句などを題材にした木版画を描かれる方であった。その後、同人の上谷昌憲さんや野村東央留さんなどのデザイン画が表紙を飾ったこともあった。近年は熊谷博人さんに続き、池田蘭径さんに表紙絵をお願いしている。

能村　研三